

## 『国富論』第1篇第5章の構造

中 川 栄 治\*

### 1. 序

『国富論』第1篇は、「労働の生産力における改良の原因と、その生産物が国民の様々な階級の間に自然に分配される秩序について」（第1篇の表題）論じる。前者の部分（生産）は分業によって説明され、それから後者の部分（分配）への移行は、文明社会に富裕をもたらす分業、それを支える交換、といった脈絡で、交換の論理の提示を経由してなされる。

分業は、スミスの場合、事実上、作業場内での分業と商品生産者間の社会的分業として論じられ、前者の分業の効果を例にして後者の分業の効果が説明される。そこでの商品生産者間の社会的分業は、事実上、独立商品生産者と、作業場内分業を組み入れた商品生産者との混在のもとでの、商品生産者間の社会的分業であった。そこでは、作業場を所有する事業主、作業場で働く職人、その職人が使用する生産手段の存在が、当然のこととなっている。そこで扱われる商品には、独立生産者の供給する商品とともに、そのような事業主の供給する商品が存在するのである。そしてスミスは、そのような（社会的）分業に参加する主体の心的契機となっているものを、人間の交換性向および自愛心とし、また、その分業を支えるのが、市場における交換であり、その分業と交換（市場）は相互連関的に進展する可能性を持つ、とみる（論理的には、市場との相互依存関係は、商品生産者間の社会的分業は直接的、作業場内分業は間接的であり、

また、両分業間には相互促進的側面がある）（第1篇第1章から第3章）。そしてスミスは、第4章冒頭で、「商業的社会（commercial society）」の概念を提示し、分業と交換によって支えられる「商業的社会」によって、彼が分析の対象とする社会の性格を特徴づけ、またそこで商品の価値を測り、交換の手段・媒介物として使用されている貨幣の起源と、それが商業の普遍的用具となってきた過程に論及し、そしてそのうえで、その貨幣の奥にある交換の論理を明らかにし、それをつうじて、「生産物が国民の様々な階級の間に自然に分配される秩序」の問題に進もうとするのである<sup>1)</sup>。

スミスはそのような脈絡で、交換の論理に関する問題を取り上げようとするのであるが、第4章で、貨幣を論じた後、その問題の論究計画を示そうとする（Smith（1976; 1776）——グラスゴウ版；以下、WNと略記——Liv.12-18, 大河内訳I, 49-51頁を見よ）。

スミスのその論究計画については様々な形で論評等がなされてきたが<sup>2)</sup>、そこに示されるスミスの文言を文字通りに受け取れば、スミスは、人々が財貨を貨幣と交換したり、また、財貨を相互に交換したりする際に、自然にまもる原則（rules）が、財貨の交換価値（exchangeable value）（相対価値 relative value）を決定（determine）するとみて、その原則を検討しようとする。スミスは、財貨の交換価値（相対価値）の決定の検討という問題を、財貨と貨幣との交換また財貨と財貨との交換に際して人々が自然にまもる原則の検討として捉えるのである。そしてスミスは、いわゆる「価値のパラドックス」

\* 広島経済大学名誉教授

(水とダイヤモンド)を例にあげ、「ある特定の対象物の効用」としての「使用価値」と、「その対象物の所有がもたらす他の財貨に対する購買力」としての「交換価値 (value in exchange)」とを区別したうえで、諸商品の交換価値を規制 (regulate) する原理 (principles) を究明するために、この交換価値 (exchangeable value) の真の尺度 (real measure) は何か、商品の真実価格 (real price) は何にあるか、を第5章で、商品価格の構成部分を第6章で、商品の自然価格と市場価格を第7章で、論じる計画を提示する。スミスは、第1篇第4章で、貨幣の起源と、それが商業の普遍的用具となってきた過程を論じ、そのうえで、その第4章末において、第5、第6、第7章で交換価値の問題を取り扱うとし、そして、商品の交換価値を規制する原理を究明するために、第5章では、この交換価値の真の尺度は何か、商品の真実価格は何にあるか、を明らかにしようとするわけであるが、そこでは、「真実価格」は、交換価値とは別概念というよりも、真の尺度のタームで表示された交換価値としての真実の交換価値にあたるものを意味している、とみることができる<sup>3)</sup>。

なお、スミスは、例えば、『法学講義』のBノートにおいて、労働の価格に論及した後、財貨の市場価格について次のように述べている。「財貨の市場価格は、大変違った事情によって規制される。買い手が市場に来る時、彼が売り手に向かって、それらの財貨を生産するのにどれだけの費用がかかったかと、尋ねることは決してない。財貨の市場価格は、次の三つのことに依存する。／第一は、その商品に対する需要あるいは必要 (need)。ほとんど役に立たないものに対しては、需要がない。それは欲求 (desire) の合理的な対象ではないのである。／第二に、その商品が、その必要に比して豊かか稀少か。もしその商品が稀少であれば、価格は上昇するが、もしその量が需要に供給するの

に十分以上であれば、価格は下落する。こうして、ダイヤモンドや他の宝石が高価であり、他方で鉄が、はるかに有用であるのに何倍か安いのは、このためなのであるが、これは主として最後の原因による。すなわち、／第三に、需要する人々の貧富。すべての人に役立つだけ生産されていない場合は、せり人たちの財産だけがその価格を規制する」(Smith (1978); グラスゴウ版, Report dated 1766——以下, LJ (B) と略記——, 227-228. 水田訳, 287-88頁)。また、価値の真の尺度については、しばらく後で、「我々は、何が貨幣を価値の尺度にしたのかを示した。しかし、貨幣ではなく労働が、真の価値尺度であることに、注意しなければならない」(LJ (B), 244. 水田訳, 306頁) と述べている。

講義Bノートでは、スミスは、上のように、事実上、価値のパラドックス (ダイヤモンドと鉄) を必要・欲求と稀少性で説明しつつ、財貨の市場価格の規制を、需要 (必要・有用性; 欲求; 貧富) と供給 (豊富・稀少) で説明し、それから後に、貨幣ではなく労働が真の価値尺度であるとの言及をなす。それに対し、『国富論』では、価値のパラドックス (水とダイヤモンド) で例証して使用価値と交換価値を区別し、交換価値を研究対象としようとするわけであるが、その際スミスは、まず、その交換価値の真の尺度を明らかにし (第5章)、次いで、交換価値 (価格) の構成部分を明らかにし (第6章)、そのうえで、自然価格との関わりで、講義Bノート以来の関心事である商品の市場価格の規制を考察する (第7章)、というより拡大され、より組織化された形で商品の交換価値の分析を行うための計画を示そうとするのである。

本稿は、そのような脈絡のもとで展開されるスミスの価値分析の検討に際し、まず、第1篇第5章の構造を明らかにしておこうとするものである。

## 2. 第5章が扱う三つの問題

筆者は、『国富論』第1篇第5章は事実上、次の三つの問題を取り扱っていた、とみる。

### 【問題1】

スミスは第5章を、「人が富んでいたり貧しかったりするのは、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。だが、分業がひとたび徹底的に行きわたるようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さな部分にすぎない」、という文言からはじめる。この社会は、第4章冒頭に明示されている「商業的社会」に対応する社会である。そしてスミスは、そのような分業が徹底的に行きわたるようになったあとの社会・交換社会（商業的社会）において人々が様々な商品の交換価値の大きさを測定する際の真の尺度となるもの（そしてこの真の尺度で測られた交換価値の大きさが、真実交換価値の大きさとなる）を明らかにしようとする。ここでは、論理的には、分業・交換社会（商業的社会）において様々な商品を交換するに際して、個々の商品の真実交換価値を表示しうる尺度、その尺度で表示された真実交換価値の逆比率で個々の商品が相互に交換されることになる尺度、ということが問題となる。そしてスミスは、そのような機能を果たしうる尺度として支配労働尺度をあげようとする（第1－第3段落）。

次いでスミスは、そのような支配労働尺度を使用する際の問題点として異質労働の問題に言及する（第4段落）。また、大多数の人々にとっては、労働の量は、抽象的な観念であって自然で明白なものではないため、商品価値を、当該商品と交換される特定商品の量によって測るほうが分かりやすく、さらに、貨幣が商業の共通の用具になると、商品の交換は、貨幣を媒介として行われるようになり、そこでは、商品価値

を、当該商品と交換される貨幣の量によって測るほうが、より自然で明白なこととなる、という考えを提示する（第5－第6段落）。

第1－第6段落では、事実上、同一時点における商品価値の表示の問題が扱われている。スミスは第1篇第4章冒頭で「商業的社会」概念を提示した後、分業が確立した商業的社会における商業の普遍的用具としての貨幣の起源と使用に関する議論を展開した。すなわち、スミスは、文明社会の富裕を支える分業、その分業を支える交換、その交換を容易にするもの、交易の共通の用具また価値を測定するものとしての貨幣といった脈絡で、貨幣が考案され、使用されるに至った経緯の説明をなした。またそこでのスミスの議論によれば、鑄貨の改悪といった問題をはらみつつも、貨幣が、文明国、分業が確立している商業的社会において、商業の普遍的用具となり、この用具の媒介によって財貨が売買、交換される、ということになるのであった<sup>4)</sup>。同一時点における商品価値の表示という問題については、論理的には、貨幣でもそのような尺度の機能を果たしうるはずである。しかしスミスは、分業が徹底的に行きわたっている商業的社会での、他人の労働に対する支配力に応じての人の富裕の程度（必需品・便益品・娯楽品を享受できる程度）ということに言及しつつ、そのような社会での各商品の交換価値（他財貨に対する購買力）が意味することという視点から、支配労働尺度という考えを提示し、それに関連する議論を展開するのであり、そしてそのうえで、現実には、貨幣のほうがより簡明な尺度であることを認めるのである。

### 【問題2】

だが、スミスは、続く第7段落の冒頭で、「けれども金銀は、すべての他の商品と同じようにその価値が変動し、安価なこともあれば高価なこともあり、購買が容易なこともあれば困難な

こともある」と述べる。そして彼は、経時的な価値の不変性ということから、真実交換価値の理想的価値尺度としての労働、さらに、長い期間における次善の価値尺度としての穀物、短い期間における次善の価値尺度としての貨幣、といったことに関する議論を展開するのである（第7－第22段落）。ここでは、スミスは事実上、【問題1】の同一時点における商品価値の表示の問題というよりも、商品価値の異時点間比較の問題を考えているのである。また、彼が価値尺度というとき、事実上、ある所与の時点における商品価値を測定するだけでなく商品価値の異時点間比較を可能にする価値尺度のことを考えようとしている、ということとなる。

スミスはまず、労働者の視点からの労働の価値の不変性をあげることによって、異時点間における価値の尺度としての支配労働尺度の妥当性を説明しようとする（第7段落）。

次いで、労働1単位当たり雇用に要する財貨の量の経時的可変性から、雇い主の視点から見た場合の労働の価値の経時的可変性、その意味での労働の真実価格の経時的可変性を認める。そしてスミスは、この後者の意味での労働の真実価格を、世間一般に流布している意味での労働の真実価格として認め、商品についてもこの意味での商品の真実価格を認める。スミスは、事実上、商品の真実価格（真実交換価値）を労働タームでの価格とするとともに、財貨タームでの価格としての世間一般に流布している意味での商品の真実価格という考えも認めるのであり、それらを、貨幣タームでの価格としての名目価格と区別するのである（第8－第9段落）。

スミスはこのように、彼のいう意味での真実価格と世間一般に流布している意味での真実価格との存在を認めたうえで、諸商品と労働の、真実価格（真実交換価値）と名目価格とを区別することの実践的有用性を指摘しようとする（第10－第17段落）。その脈絡でスミスは、その

有用性の一例として、長期間を経ての貨幣地代の価値の減少と穀物地代の価値の相対的安定性による、地代受領者にとっての穀物地代の有利さ、といったことに関する議論を展開する<sup>5)</sup>。また、その貨幣地代と穀物地代を論じる過程でスミスは、いついかなるところでも諸商品の価値を比較することのできる唯一の標準という意味で、唯一の正確かつ普遍的な価値尺度としての労働、長期では銀よりも正確な価値尺度としての穀物、短期では穀物よりも正確な価値尺度としての銀、その根拠としての長期における穀物の労働支配力の相対的安定性、短期における銀の労働支配力の相対的安定性、といった考えを提示する。

なお、スミスは、例えば、永代地代の設定や長期の借地契約の締結に際しては真実価格と名目価格の区別は有用であるとしても、売買といった普通の、通常の取引に際してはそうとはいえない、ともする。すなわち、同一の時と場所では、一定額の貨幣は一定量の労働支配力を意味し、商品の真実価格と名目価格は正確に比例する。離れた場所の場合は商品の真実価格と名目価格との間には正確な比例関係はないが、商人たちの関心事は、財貨を仕入れる際の銀の量とその財貨の販売で得られる銀の量との差である。価格に関わる日常的業務を規制するものは、財貨の真実価格というよりも名目価格なのである、というわけである（第18－第21段落）。

しかし、スミスはまた、「本書のような著作で、ある特定の商品の、様々な時と場所における様々な真実価値を比較すること、言い換えると、ある特定の商品が、様々な場合にそれを所有する人たちに与える、他の人々の労働を支配する力の様々な程度を比較することは、ときには有用なことであろう」とする。彼は、そのような比較は、その商品の支配しうる銀の量（貨幣価格）の比較によってではなく、その商品の支配しうる労働の量の比較によってなされるべ



きである、とするのであるが、同時に、離れた時と場所について支配労働量算出に必要な労働の時価（current prices of labour）に関する正確な情報入手の困難性を指摘する。そしてこの問題への対処法として、商品が支配しうる穀物量を使用して比較する方法を提起する。その根拠は、穀物の時価は一般に労働の時価よりもよく知られているということ、そして、普通入手できるものの中では、穀物の時価は、労働の時価と最も同一に近い割合を維持しうる、ということである（当該商品の貨幣価格を穀物価格で割って当該商品の支配しうる穀物量を得れば、その穀物量は、当該商品の貨幣価格を貨幣賃金率で割って得られる当該商品の支配しうる労働量と最も安定的な割合を維持しうる。その穀物量は、支配労働量の指標となりうる）。そしてスミスは、第5章では、この問題に関しては、「私は後で、この種の比較を幾つか試みることにしたい」と述べ、事実上、【問題2】の異時点間比較を可能にする尺度に関する議論を終える（第22段落）。

### 【問題3】

スミスは第1篇第4章で、貨幣が考案され、使用されるに至った経緯の説明をなし、また、上の【問題1】の脈絡で、現実には多くの人々にとって労働よりも貨幣のほうがより簡明な尺度であるとし、【問題2】の脈絡で、現実の取引での関心事としての貨幣タームでの価格という見方を示したのであるが、そのような認識に基づきつつ、【問題1】、【問題2】での議論にくわえて、17頁から成る第5章の後半8頁（グラスゴウ版『国富論』）を、現実の商業の用具、一般的な価値尺度としての貨幣との関連で、ローマ共和国→ローマ帝国以来スミスの時代に至る時期の鑄貨制度に関する議論を展開し、第5章を終えるのである（第23－42段落）。

なお、この【問題3】の部分での議論の過程

でスミスは、例えば以下のような諸点も指摘している。

すなわち、たまたま最初に商業の用具として使用された金属が一般に価値の尺度として特に取り扱われた（WN I.v.23. 大河内訳 I, 66頁）。もともと支払い上の法貨となりえたのは、価値の標準または尺度（standard or measure）と特にみなされた金属でつくられた鑄貨だけであった（WN I.v.26. 大河内訳 I, 68頁）。また、例えば金で勘定を記録する習慣や約束手形その他の貨幣債務を金で表示する習慣が一般に行われるようになると、金が特に価値の標準または尺度となる金属と考えられるようになる（WN I.v.28. 大河内訳 I, 70頁）。

また、鑄貨の一定量の価値そのものは（したがって、例えば一定量の鑄貨で納められる地代、貨幣地代の価値）は、当該鑄貨に使用される金属の価値の低下、また、同一名称の鑄貨に含まれている金属量の減少によって低下することになる（WN I.v.13-14. 大河内訳 I, 60頁）、また、その金属量の減少そのものは、鑄貨の改悪や鑄貨の使用に伴う磨滅・損耗によっても生じる（WN I.v.13-14, 40. 大河内訳 I, 60, 77頁）。

そのような事情から、例えば、ある特定の国の貨幣が、ある特定の時と場所でどの程度正確な価値尺度たりうるかは、流通貨幣が、その貨幣が含有しているべき純金量または純銀量をどの程度正確に含有しているかによる。なお、商人は、財貨の価格を、鑄貨が含有しているべき純金量または純銀量ではなく、経験上実際に含んでいることが分かる平均値に適応させている（WN I.v.41. 大河内訳 I, 78頁）。

そして、スミスはそれらの指摘にくわえ、自分が財貨の貨幣価格という時、鑄貨の名称とは関わりなしに、それらの財貨の販売と引き換えに得られる純金量または純銀量を意味する、とする（WN I.v.42. 大河内訳 I, 78－79頁）。さらに、金銀地金の市場価格のその時々の変動そ

のものは、他のすべての商品の市場価格のその時々の変動と同一の諸原因による、ともしている (WN I.v.40. 大河内訳 I, 77頁)。

筆者は、スミスが第5章で扱っていた問題は事実上、上記の三問題であった、とみるのである。

なお、その三問題のうち、【問題1】と【問題2】での問題は、主に純理論的な尺度の問題であるが、その【問題1】中、【問題2】中での貨幣に関する言及、および【問題3】での貨幣に関する言及は、現実社会での現実の取引で機能している尺度および貨幣の制度に関わる問題を論じるもの、といえる。そして、そのような形式での議論の展開そのものは、現実経済から遊離することなく現実経済についての確実な認識を踏まえた上での理論的研究というスミスの姿勢を示している、ともいえる。

また、この【問題3】での問題を扱う部分は、これまであまり注意の払われることのなかった部分であるが、そこでのスミスの議論そのものは、例えば、スミスが第5章の議論で想定していた社会は、「初期未開の社会」でない「商業的社会」であったことを傍証している。

さらに、スミスは、第4章、そしてこの第5章で触れた貨幣に関する議論の延長線上で、第2篇第2章中での貨幣に関する議論を予定していた、ともいえる。

### 3. 一時点における価値の尺度と異時点間における価値の尺度

オブライエン (1975) によれば、『国富論』第1篇第5章は「偉大な一経済学者のベンから生まれることとなった恐らく間違いなく……最も入り組んだ章」とされる<sup>6)</sup>。事実、それを裏書きするかのように、第5章でのスミスの議論を巡って極めて多様な解釈が提示されてきた<sup>7)</sup>。筆者は、第5章でスミスが扱った問題を、事実

上、前述の三問題とみるのであるが、ここでは、前述の【問題1】と【問題2】との関連で、それら諸研究のうちの幾つかを見つつ、第5章の構造について考える。

#### 3.1 ミークとオドーネル

例えばミーク (1973; 1956) の所説中には、事実上、以下のような見解が見出される。

スミスの出発点は、分業社会での商品交換は社会的労働の交換であるということである。そしてスミスは、商品価値の「真の尺度」は当該商品と交換される労働の量であるとする。人が商品を市場で売り、その売り上げで他のなににかを買おうとする時、実際には、労働と労働を交換しているのであって、その商品の「真の値打ち (real worth)」, 「真実価値 (real value)」は、その商品がその交換でその人をして支配させうる「労働」の量で測定される、ともしっかりいえることができる。だが、その売り上げで買う「他のなににか」は、ある量の労働の、現在の用役でも、過去にある量の労働が費やされた (expended) 他の商品でもありうる。それら二つの労働量が同一であるのは、独立小生産者社会においてのみであろう。人が、自分の商品の「真実価値」——その商品で支配しうる「労働」量——を測定しようとするならば、それを、その商品の売り上げで雇いうる現在の労働 (present labour) の量への関連において測定しようとするのか、それとも、その売り上げで買いうる他の商品のなかに体化されている過去の労働 (past labour embodied) の量への関連において測定しようとするのか。もし、商品の交換は本質的にはそれらの商品に体化された労働の交換であるという考えから価値の分析をはじめのなら、その選択は論理的に、上の二つのもののうち後者に向かうように思われる。だがスミスは、前者を採用した。スミスが『国富論』で、「真の尺度」を、商品と交換されうる労働の量——そ

の商品の売り上げ雇いうる現在の労働の量——としたのは、『国富論』で価値の問題を、事実上、かなり発達した資本主義経済に特有の基本的経済諸過程への関連において考察することからはじめた（そして、スミスは特に資本主義的蓄積過程の分析に関心を持っていた）ということによるところが大きい。労働力が商品となった資本主義社会でのみ、商品の「真の値打ち」が、その商品の労働自体に対する購買力（その商品の、労働の生産物に対する購買力と区別された）と結び付けられる可能性がある。その意味で、価値の「真の尺度」としての支配労働という考えは、その考えの生まれた資本主義社会のしるしを身に付けている。しかしまた同時に、スミスは『国富論』で、「真の尺度」としての支配労働（支配しうる現在の労働の量）という考えを、社会的分業がくまなく行われているあらゆる種類の社会に適用しうるかのように一般的な形で表現しようとするのであり、スミスのその議論そのものは、価値の「真の尺度」としての支配労働という考えを、資本主義社会にだけでなく社会的分業によって特徴づけられるあらゆる社会に妥当するものとして一般化しようとするとともに、その尺度は貨幣のバールを貫いて交換の外的現象の奥に横たわる一定の基本的社会関係にまで到達するという意味で、真の尺度なのだ、と主張しました、というわけである<sup>8)</sup>。

それに対し、オドーネル（1990）は、上のようなミークの見解では、スミスは資本主義経済の分析のために立案した彼の労働支配力尺度を、交換経済のすべての形態にあてはまるようにすることを試みているのであって、事実上『国富論』第1篇第5章のはじめの方の諸段落はそのような一般化の試みのなされている箇所ということになっている、とみる<sup>9)</sup>。そしてオドーネルは、そのようなものとしてのミークの見解に対して、事実上次のような見方を提示する。

すなわち、価値尺度の問題は主に第1篇第5章で扱われている。第5章でのスミスの議論自体は、はじめの方の部分は前資本主義経済に、残りの部分は資本主義経済に関連する。スミスが労働を「商品の交換価値の真の尺度」として定義したのは前者の議論においてであったが、労働支配力尺度の論理を示したのは後者の議論においてであり、その尺度が実際に適用されたのは資本主義経済に対してであった。第1－第7段落が前資本主義経済に関連する議論であり、第1－第3段落では「あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人に対して真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」（WN I.v.2. 大河内訳 I, 52頁）という実際上は生産性の一尺度である「真実価格」の定義が採択され、またそこでは、「体化労働」と「支配労働」との両方のことがいわれていた——より正確には、この段階では、一商品の生産に費やされた労働（「体化された労働」）の量と一商品が支配しうる財貨のなかに体化された労働の量とが区別されていなかった——。そのような前資本主義的交換経済においてはそれら二つの労働量は等しくなる。また、第7段落中でスミスは生産を「労働者の観点」からみつつ、労働時間が実際に、生産の困難さの良好な尺度であることを主張し、「等量の労働は、時と場所のいかに問わず、労働者にとっては等しい価値を持つものということができよう」（WN I.v.7. 大河内訳 I, 57頁）等々といったことを述べることによって、価値の尺度あるいは諸商品の「真実価格」として労働を選択することを正当化するための不変性ということを指摘しつつ、価値尺度としての労働の選択を明言した。そして、この段階では「体化労働」と「支配労働」との区別はなされていなかったが、上のようなことを論じるスミスの諸文言は、生産に費やされる不変量の労働は不変量の価値を創造するということを述

べているものとして理解することができる。スミスは続く第8段落以下での資本主義経済に関連する議論において、「労働者の観点」から「労働を雇う人々の観点」への転換をなし、また、「真実価格」という用語の意味を、労働時間によって表現されるものとしての「労苦と骨折り」の量を指すものから、生活資料の量によって表現されるものへと拡張しようとした。そしてスミスは諸商品と労働の、「真実価格」のこの後者の考えを、練り上げ、使用しようとした。特に、スミスがすべての他の諸商品の真実価格の尺度として採択したのは、労働の真実価格についてのこの考えであった（したがって、この意味での労働の真実価格の単位数で表現された商品価値が、商品の真実交換価値の大きさということになる：支配労働尺度）、というわけである<sup>10)</sup>。

なお、オドーネルによれば、スミスはそのような「労働者の観点」から「労働を雇う人々の観点」への転換を意識的にしたのであり、また、労働時間の量によって表現されるものとしての「労苦と骨折り」の量という「真実価格」概念を放棄して生活資料の量によって表現されるものとしての「真実価格」概念をとったわけでも、それら両概念の間で混乱していたわけでもなく、むしろスミスは、一群の仮定を設定することによってそれら両概念を矛盾のないものとして捉えようとしていたのであって、そこでのスミスの議論そのものは論理の一貫した内容を持つものであった、とされる<sup>11)</sup>。

ミックとオドーネルは、『国富論』第1篇第5章は価値尺度の問題を取り扱うとみる<sup>12)</sup>。そしてミックは、スミスは第5章で、資本主義社会のしるしを身に付けている彼の労働支配力尺度を、交換経済のすべての形態にあてはまるようにすることを試みている、とみる。それに対しオドーネルは、スミスは第5章において価値尺度の問題を取り扱う際、第1－第7段落で前

資本主義経済に関連する議論を、第8段落以下で資本主義経済に関連する議論を展開する、とみるのである。

### 3.2 ダウンポート

ミック（1956; 1973）、オドーネル（1990）に対し、例えばダウンポート（1908）は、スミスの議論においては、「価値の決定因（determinant of value）」の問題（「価値の決定因、さらに、価値の、決定力を持つ源泉（determinant source of value）」の問題）、「同時に存在する諸価値の尺度あるいは公分母（measure or denominator of coexisting values）」の問題（「測定の手段、表現の様式、諸価値がそれに還元されることができたそれによって諸価値が等質的で比較可能なものにされうところの公分母（common denominator）、価値表現の標準（standard of value expression）」の問題）、「延べ払いの標準（standard of deferred payment）、広範な時間的間隔にわたっての比較の手段（medium of comparison over wide intervals of time）」の問題、というその性質において本来別個なものであるはずの三つの問題が、混乱した形で論じられている、とみる。また、スミスの議論においては事実上、「延べ払いの問題」そのものは一つの価値問題として現れており、そして延べ払いの標準は価値の標準に同化させられている、ともする<sup>13)</sup>。

### 3.3 ミック、オドーネルとの比較で

スミスは『国富論』第1篇第5章で、資本主義社会のしるしを身に付けている彼の労働支配力尺度を、交換経済のすべての形態にあてはまるようにしようと試みている、とみるミック、そのミックと同様第5章を価値尺度の問題を扱う章とみつつ、スミスは第5章の第1－第7段落で前資本主義経済に関連する議論を、第8段落以下で資本主義経済に関連する議論を展開す



る、とみるオドーネルに対し、筆者は、前資本主義社会と資本主義社会といった見方はとらず、第5章でスミスは、事実上資本主義社会と重なる要素を多く持つ交換社会としての、第4章冒頭で提示される「商業的社会」における価値の尺度を扱おうとした、とみる。

スミスの議論における「商業的社会」では、独立の商品生産者が存在し、同時に、作業場内分業も存在する。事実上、その社会では、資本が存在し、労働・資本・土地の各用役も売買の形で交換され、独立生産者そして労働用役を販売する労働者も、対等な参加者として他の参加者とともに市場に参入する。その社会の構成員は、支配と従属でなく、私有財産所有者として互いに、自由、平等、独立の関係にあり、その社会は、私有財産の交換をつうじて、金銭的考慮に基づく交換をつうじて営まれる社会である。同時に、その社会は、生まれその他の封建的諸束縛から解放された社会である。そこでは、地主、資本家、労働者、独立生産者はともに私有財産所有者であり、彼らの各々の報酬も正当な報酬として存在しうるのである。その社会は市場経済が営まれる社会であり、資本主義と重なる要素を多くそなえた社会であるが、同時に、地主階級、資本家階級、労働者階級および独立生産者たちの間には（とりわけ後者の三グループの間には）、物質的にも精神的にも相互の流動性が多く残り、彼らの間では精神的な立場の交換も容易であることが確保されている社会である<sup>14)</sup>。スミスは、例えば、土地所有者階級および賃金労働者階級の利害は公共社会の利害と合致し、資本（ストック）所有者階級の利害は公共社会の利害と合致しないといった見方を提示するが（WN Lxi.p.7-10. 大河内訳 I, 402-6 頁）、そこで考えられている社会は、資本の蓄積と土地の占有に先立つ「初期未開の社会状態」といった社会でないことはむろんのこと、資本家階級が、階級内での生き残りをかけた熾

烈な競争のもとで、労働者階級を搾取しつくすといったマルクスによって描かれる社会でもないのである。

筆者は、スミスは第5章を通じて、上のようなものとしての「商業的社会」における価値の尺度を論じようとしたとみる。そして、第5章自体は、本稿の2であげたような三つの問題を扱うものであった、みるのである。

### 3.4 ダウンポートとの比較で

ミーク、オドーネルの場合は、『国富論』第1篇第5章は価値尺度の問題を取り扱い、そしてスミスの議論では価値尺度の問題は価値決定の問題とは別の問題であった、とみられる<sup>15)</sup>。その点については、筆者も同様な見方をとる<sup>16)</sup>。

それに対し、ダウンポートは、「価値の決定因、さらに、価値の、決定力を持つ源泉」の問題、「同時に存在する諸価値の尺度あるいは公分母」の問題、「延べ払いの標準、広範な時間的間隔にわたっての比較の手段」の問題は、別個なものであるはずの三つの問題と捉え、その視点から、スミスはそれら三問題を混乱した形で論じている、とみるのである——なお、本稿の注8中および注11中でみたように、ミークの場合には、価値の源泉（原因）の説明と価値の規制（決定）の説明とは厳密には同一のことでなく、スミスの議論でも事実上別個なものとして扱われている、とみられ、また、オドーネルの場合には、事実上、「価値の説明（価値の因果的説明）の問題」と「価値尺度の問題」とは論理的に別個の問題とみられ、「価値の説明」の脈絡でのスミスの議論、「価値尺度」の脈絡でのスミスの議論といった形で論じられる——。

ミーク、オドーネルは、「同時に存在する諸価値の尺度あるいは公分母」の問題と「延べ払いの標準」の問題、といった視点はとらない。彼らは事実上、スミスの考える価値尺度はある所与の時点においても経時的にも機能しうる尺

度として認識しているのである。それに対し、ダヴンポートの場合には、事実上、ある所与の時点における価値の測定・比較の問題（「同時に存在する諸価値の尺度あるいは公分母」の問題）と異時点間における価値の測定・比較の問題（「延べ払いの標準、広範な時間的間隔にわたっての比較の手段」の問題）とは別個な問題として認識され、スミスはそれら別個な二つの問題を（さらに、「価値の決定因、価値の、決定力を持つ源泉」の問題を）、混乱した形で論じている、とみられるのである。

筆者のみるところでは、スミスは、第5章第1－第6段落で、事実上、同一時点における商品価値の表示の問題を扱う。そして、スミスは、支配労働尺度という考えを提示しつつも、現実には、貨幣のほうがより簡明な尺度であることも認めるのであるが、続く第7段落冒頭で、「けれども金銀は、すべての他の商品と同じようにその価値が変動し、安価なこともあれば高価なこともあり、購買が容易なこともあれば困難なこともある」と述べて、真実交換価値の異時点間比較を可能にする価値尺度を論じようとする。

ダヴンポートが混乱とするものの一つはこの箇所にあたる。スミスの議論によれば、「商業的社会」では、貨幣が、商品の価値を測り、交換の手段・媒介物として使用され、商業の普遍的用具となっている。そしてスミスは、第5章で、まず、分業が徹底的に行きわたっている商業的社会での商品価値（他財貨に対する購買力）が意味することという視点から、支配労働尺度という考えを提示し、それに関連する議論を展開するとともに、現実には、貨幣のほうがより簡明な尺度であることを認める。そして、ある意味で突然、続く第7段落冒頭で、上の文言を示すのである。なぜ突然か、といえ、その文言までの文脈は、同一時点での交換に関わる文脈であるからである。そこでは、諸商品の交換価値を規制する原理を究明するためにまず、価

値尺度の問題、商品価値の表示の問題を扱うとしても、そこでの問題そのものは、今日というニュメラルの問題に相当するものであって、論理的には、支配労働尺度、あるいはまた貨幣も、その役割を果たしうるのである。その点からすれば、第5章の第1－第6段落の議論と、上の金銀の価値変動についての文言にはじまる第7段落以下での議論との間には、一つの転調がある。第7段落以下での議論は事実上、異時点間比較を可能にする価値尺度の問題に関するものである（今日の論者が、例えば、物価指数で処理しようとする問題にあたるものである）。

スミスは、経時的变化の確定、異時点間比較をなすためには、といった前置きあるいは断り書きを示してはいない。しかしそのことは、スミスは事実上、ある所与の時点における商品価値の測定だけでなく商品価値の異時点間比較をも可能にする価値尺度を考えようとしていたことを示している、ともいえる。

なお、本稿2中でもみたように、スミスは、事実上、同一時点における商品価値の表示の問題について、現実には、多くの人にとって貨幣のほうがより簡明な尺度であることを認めていた。そしてスミスは、異時点間比較に関わる議論の脈絡においても、商人たちの主要関心事は名目価格であることを認めるわけであるが、このようなスミスの認識は、他面で、スミスは事実上、同一時点における価値尺度の問題と異時点間における価値尺度の問題との性質の違いに気付いていたことを示唆している、と考えることもできよう。

#### 4. スミスの不変の価値尺度が意味すること

筆者のみるところでは、『国富論』第1篇第5章においてスミスは商業的社会に関連する議論を展開しているのであり、その社会の構成員は、「労働者の観点」からも「労働を雇う人々

の観点」からも物事を考えることができ、相互に同感することができるのである。そして、スミスによれば、商品の交換価値は、当該商品商品の他財貨に対する購買力であるが、商業的社会では、商品の真実交換価値（真実価格）とその変動は、支配しうる労働の量で示された他財貨の量（支配労働量）とその変動として把握され、労働の真実交換価値（真実価格）は、労働者の観点からみて、経時的に不変、ということになる。またスミスは、世間一般に流布している意味での、労働の真実価格（真実交換価値）、商品の真実価格（真実交換価値）ということに言及し、そこでは、労働の真実価格（真実交換価値）、商品の真実価格（真実交換価値）は、労働が支配しうる生活の必需品と便益品の量（労働が支配しうる財貨の量）、商品が支配しうる生活の必需品と便益品の量（商品が支配しうる他財貨の量）と捉えられる。そしてスミスは、そのような二様の真実価格把握を認めたうえで、真実価格を考慮することの具体的有用性の一例として、貨幣地代価値の経時的減少と穀物地代価値の経時的安定性に関する議論を示そうとしている、とみるのである。

また、上でみたような、支配しうる生活の必需品と便益品（財貨）の量としての、スミスのいう、世間一般に流布している意味での（俗見での）労働の真実価格（真実交換価値）および諸商品の真実価格（真実交換価値）は、事実上、今日我々が、労働の実質賃金率、諸商品の実質価値・実質価格として理解しているものに対応している、といえる。スミスのいう意味での労働および商品の真実価格（真実交換価値）は、支配しうる労働のタームで示された支配しうる生活の必需品と便益品（財貨）の量であり、支配しうる生活の必需品と便益品（財貨）の量そのもの（今日、例えば物価指数を使用して確定されるようなもの）で示されるのは、俗見での労働および商品の真実価格（真実交換価値）な

のである<sup>17)</sup>。

さて、スミスは、第5章第7段落中で、「人間の足の大きさとか、一尋の長さとか、一握りの量とか、というようなそれ自身の量が絶えず変動する量の尺度は、決して他の物の量の正確な尺度とはなりえない。それと同じように、それ自身の価値が絶えず変動するような商品も、他の諸商品の価値の正確な尺度とは、決してなりえない」と述べる（WN I.v.7. 大河内訳 I, 57頁）。

第4章末に示されるような、諸商品の交換価値を規制する原理を究明するために、第一に、この交換価値の真の尺度は何かを明らかにする、という課題については、少なくとも、同一時点における諸商品の交換価値を規制する原理を究明するための、諸商品の交換価値の大きさを表示する尺度、ということについては、論理的には、貨幣を含め任意の一商品が、一貫して使用されれば、そのような尺度の機能を果たしうるはずであって、そこでの問題はニュメールの問題に対応することにもなる。スミスは、まず、分業が徹底的に行きわたっている商業的社会での商品価値（他財貨に対する購買力）が意味することという視点から、任意の一商品でなく支配労働という尺度でなければならないという考えを提示するのであるが、そこでは、必ずしも、尺度となるものの価値の不変性ということとは必須の要件ということにはならないはずである。それが問題になるのは、価値の異時点間比較を考える場合である。

その場合には、前のスミスの文言に示される論理からすれば、例えば商品 A の価値（交換価値）の大きさを商品 B のタームで表示して、その価値が異時点間で上昇（下落）した時、もし商品 B の価値が経時的に不変なものであれば、その上昇（下落）およびその程度は、商品 A の価値の上昇（下落）およびその程度を正確に反映しうる、ということになる。リカードウの

『経済学および課税の原理』第3版(1821)で第1章に新設された第6節「不変の価値尺度について」の第一文は、スミスのこのような論理との関わりで述べられたものといえる。

スミスの考えによれば、一商品の価値を支配労働量で表示すれば、異時点間でのその支配労働量の増加(減少)は、当該商品の価値の、当該時点間での上昇(低下)を反映しうる、ということになるのである。

また、スミスの議論では、価値尺度によって各商品の交換価値の大きさが把握され、その交換価値の逆比率が交換比率となるわけであるが、スミスはまた、例えば、「あらゆる社会の労働によって年々採集または生産されるものの総体、または同じことになるが、この総体の全価格(whole price)」(WN I.vi.17. 大河内訳 I, 88頁),「あらゆる国の土地と労働の年々の全生産物(whole produce), または同じことだが、この年々の生産物の全価格」(WN I.xi.p.7. 大河内訳 I, 402頁),「その国の土地と労働の年々の生産物の交換価値(exchangeable value), その国の全住民の真の富と収入(wealth and revenue)」(WN II.iii.13. 大河内訳 I, 528頁)等々といった見方をとっている。スミスの場合、「交換価値」は、単なる交換比率ではなく、測定可能な数量、加算可能な数量であり、今日における「価格」と同様、その「交換価値」の大きさは価値尺度のタームで表現される数量、と考えることができる。したがって、例えば、今日、一国内の全生産物の価格を集計して国内総生産を表示するように、事実上一国内の全生産物の交換価値を集計して国内総生産を表示することもできる、ということになる。

スミスの議論では、個々の商品の交換価値は加算可能な数量であり、また例えば、個々の所得の大きさ、集計としての一経済の所得の大きさや一経済の産出物の量も、交換価値の量で把握できるのである。そしてスミスの支配労働尺

度は、それらのものの大きさを測定するとともに、それらのものの大きさの経時的变化の大きさをも測定できる、ということになっているのである。スミスのいう、世間一般に流布している意味での(俗見での)労働の真実価格(真実交換価値)、諸商品の真実価格(真実交換価値)は、事実上、今日我々が、労働の実質賃金率、諸商品の実質価値(実質価格)として理解しているものに対応しており、今日我々は、その意味での実質賃金率、実質商品価値の大きさの経時的变化については、また、例えば、実質所得、実質産出量の経時的变化等については、物価水準を考慮して確定しようとする。それに対し、スミスのいう意味での、商品の真実価格(真実交換価値)の大きさ、また実質所得、実質産出量の大きさの測定、それらの大きさの経時的な比較は、支配労働尺度を使用してなされることになるのである<sup>18)</sup>。

スミスの議論における支配労働尺度は、まず、「商業的社会」において、商品の交換価値を規制する原理を究明する際の一装置としての、交換価値の大きさを表示する装置という役割を担うものであった。また、そのように商品の交換価値の大きさを表示するとともに、商品の交換価値の大きさの異時点間変化の測定、異時点間比較を可能にする尺度でもあった。その支配労働尺度はまた、個々の商品の価値だけでなく、個々の所得等の、集計的な経済的諸量の測定およびそれらの異時点間比較を可能にする尺度という役割を担うといった、スミスの経済分析における重要な分析装置であった。

本稿1中で触れたように、スミスは、講義Bノートで、価値の尺度について、「我々は、何が貨幣を価値の尺度にしたのかを示した。しかし、貨幣ではなく労働が、真の価値尺度であることに、注意しなければならない」と述べた。そして彼は、『国富論』で、上のようなものとしての価値尺度を構想しようとするのである<sup>19)</sup>。



## 5. 結 論

本稿で筆者は、『国富論』第1篇第5章の構造を明らかにしようとした。

その際、ミーク、オドーネル、ダヴンポートの所説との比較で、筆者の見方を提示しようとした。

ミーク（1973; 1956）とオドーネル（1990）は、スミスの議論では価値尺度の問題と価値決定の問題とは別の問題であり、第5章は価値尺度の問題を取り扱うとみる。そしてミークは、「真の尺度」としての支配労働というスミスの考えは資本主義社会のなかで生まれ、資本主義社会のしるしを身に付けているのであるが、スミスはその支配労働尺度を、資本主義社会だけでなく社会的分業によって特徴づけられるあらゆる社会に妥当するものとして一般化しようとしたとみる。それに対しオドーネルは、スミスは第5章で価値尺度の問題を取り扱う際、論理一貫した形で、第5章の第1－第7段落で前資本主義経済に関連する議論を、そして第8段落以下で資本主義経済に関連する議論を展開した、とみる。

他方、ダヴンポート（1908）は、スミスの議論では、「価値の決定因、さらに、価値の、決定力を持つ源泉」の問題、「同時に存在する諸価値の尺度あるいは公分母」の問題、「延べ払いの標準、広範な時間的間隔にわたっての比較の手段」の問題、という本来別個な三つの問題が、混乱した形で論じられており、またそこでは事実上、「延べ払いの問題」そのものは一つの価値問題として現れており、延べ払いの標準は価値の標準に同化させられている、とみる。

筆者は、上の諸所説に対し、前資本主義社会と資本主義社会といった見方はとらず、スミスが第5章で分析の対象とした社会を、事実上資本主義社会と重なる要素を多く持つ分業・交換社会としての、第4章冒頭で提示される「商業

的社会」、例えば本稿3.3中で触れたような内容を持つ「商業的社会」、との見方を提示した。

スミスは第5章において価値尺度の問題を扱うのであるが、その第5章でスミスは、事実上資本主義社会と重なる要素を多く持つ上のような「商業的社会」における価値尺度の問題を扱おうとした、とみるのである。

なお、我々の住む社会も一種の交換社会といえるが、我々が、同時に存在する諸商品の交換価値を測定、比較しようとするとき、それらの商品の価値を貨幣で測定し、またそれらの貨幣価格の比較によってそれらの商品の価値を比較する、ということとはよくあることである。筆者のみるところでは、この点については、スミスの考える「商業的社会」でも同様であるが、スミスはさらに、この分業・交換社会としての「商業的社会」において、商品の他商品に対する購買力が真に意味することという視点から、つまり、そのような社会では、商品の労働支配力が当該商品の他商品に対する購買力を意味することになる、ということから、真の尺度としての支配労働尺度という考えをとり、それに関連する議論を第5章の第1－第6段落で展開したのである。

筆者は、価値尺度を論じる第5章でスミスが取り扱った最初の問題は、事実上うえのような問題であるとみた。そして、スミスが扱った第二の問題に関して次のような見方をとった。

スミスはまた、続く第7段落の冒頭で、貨幣としての金銀の価値の経時的変化に言及する。これは、同時に存在する諸商品の交換価値の測定、比較だけでなく、諸商品の価値の異時点間比較へのスミスの関心を示唆しており、そしてこの脈絡でスミスは、例えば貨幣地代の価値の長期的低落、穀物地代の価値の長期的安定性といったことに関する議論を展開する。事実上この間の事情を、ダヴンポートは、スミスの議論における「同時に存在する諸価値の尺度あるい

は公分母」の問題と「延べ払いの標準、広範な時間的間隔にわたっての比較の手段」の問題、およびそれらの混同、として把握するのである。

今日、同時に存在する諸商品の交換価値の測定、比較を貨幣タームでするとしても、諸商品の価値の異時点間比較においては、物価水準を考慮して比較を行う。

スミスは事実上、所与の時点における商品価値の測定だけでなく商品価値の異時点間比較を可能にする価値尺度のことを考えようとしているのである。そしてこのような意味で、第5章でスミスが取り扱った第二の問題は、価値の異時点間比較に関する問題ということになる。

なお、収入額の測定およびその経時的比較を可能にする尺度、価値の測定およびその経時的比較を可能にする尺度としての支配労働量といったことを示唆する考えは、ペティ（1662）の議論にも見られるのであるが、『国富論』での上のようなスミスの考えそのものは、その後の経済学の展開にとって大きな意味を持つこととなるものであった。

筆者は、スミスはそのような問題に関わる議論を、第5章の第7－第22段落で展開した、とみるのであるが、続く第23－第42段落で、スミスは、事実上、価値尺度の問題を論じる第5章の第三の問題として貨幣の問題を論じている、とみた。先の第一、第二の問題は、純理論的な尺度の問題とすれば、第三の問題は、どちらかといえば、貨幣の制度および現実社会で機能している尺度に関わる問題を論じるもの、ともいえる。そしてそのような形式での議論の展開そのものは、現実経済についての確実な認識を踏まえた上での理論的研究というスミスの姿勢を示している、といえる。

スミスは、貨幣の問題を第4章で扱い、また第5章で上の第一、第二の問題を扱う過程でも、現実の取引で中心的考慮の払われるものとしての貨幣タームでの事項、といった見方を示し、そ

して第一、第二の問題を論じた後にあらためて、貨幣に関する議論を展開するのである（このことはまた、第5章は価値尺度を扱う章であり、またそこで想定されている社会は「初期未開の社会」ではなく「商業的社会」であることを傍証しているともいえる）。

スミスは貨幣的要因を軽視するよりもむしろ、現実の取引で主に考慮されるものとしての貨幣的な要因が持つ意味を認識し、この第5章の半分を貨幣に関する議論にあてるのである。そして、第4章での議論とともに第5章での貨幣に関する議論は、第2篇第2章での貨幣に関する議論の前提にもなっているのである。

筆者のみるところでは、第5章では、以上のような枠組みで議論が展開されており、そこでは、真の価値尺度によって、商品価値の測定、商品価値の異時点間比較が可能になるわけであるが、そのような、異時点間比較を可能にする価値尺度の実践的用途ということに関しては、スミスは第5章では、穀物地代と貨幣地代の長期における実質的な価値の動きの比較、またそれに基づく永代地代の設定や長期の借地契約の締結といったことへの言及にとどめ、この問題に関しては、「私は後で、この種の比較を幾つか試みることにしたい」と述べている。

そのようなこととの関連でいえば、スミスの場合、「交換価値」は、単なる交換比率ではなく、測定可能な数量、加算可能な数量であり、今日における「価格」と同様、その「交換価値」の大きさは価値尺度のタームで表現される数量、と考えることができるのであって、そこでは、例えば、今日、一国内の全生産物の価格を集計して国内総生産を表示するように、事実上一国内の全生産物の交換価値を集計して国内総生産を表示することができ、またその異時点間比較をすることができる、ということにもなる。スミスの議論では、個々の商品の交換価値の大きさ、また例えば、個々の所得の大きさ、集計

としての一経済の所得の大きさや産出物の量も、交換価値の量で把握でき、スミスの支配労働尺度は、それらのものの大きさを測定し、さらにそれらのものの経時的变化の大きさを測定できるのである<sup>20)</sup>。

『国富論』では、スミスの支配労働尺度は、商品の交換価値を規制する原理を究明する際の一装置としての、交換価値の大きさを表示する装置という役割とともに、それ以外の重要な役割を担うものとしても構想されているのである。

そのようなものとしてのスミスの価値尺度に関わる個々の論点については、別途検討することとする。

## 注

- 1) 中川 (2020), 9-11頁を見よ。
- 2) 例えば, Blaug (1959), p. 150, Blaug (1978; 1962), pp. 39-40, 邦訳 I, 64頁, Kaushil (1973), pp. 61-62, Bowley (1973), pp. 110-12, Deane (1978), pp. 23-24を見よ。また, 中川 (2016), 580頁, 704頁注19も見よ。なお, 中川 (2016) での指示箇所から, 中川 (2010), 中川 (1995a) および中川 (1995b) での関連箇所をたどることができる。以下, 同様。
- 3) 中川 (2016), 580-81頁を見よ。スミスは、『国富論』を通じて、「交換価値 (exchangeable value; value in exchange; exchange value)」という用語とともに, 例えば「真実価値 (real value)」, 「真実価格 (real price)」, さらに「価値 (value)」, 「価格 (price)」等といった用語を使用する。そして, 例えば, 第1篇第6章中では, 「すべての特定商品の価格または交換価値 (price or exchangeable value)」(WN I.vi.17. 大河内訳 I, 88頁) といった文言を示しているように, スミスには, 「価値」という用語と「価格」という用語, あるいは「交換価値」という用語と「価格」という用語を厳密な区別なしに使用する側面がある (スミスの語法に関する欧米諸文献での多様な理解については, 中川 (1979) を見よ。中川 (1995a) および中川 (1995b), 中川 (2010) および中川 (2016) 中の諸所も見よ)。
- 他面で, 第5章の表題にも示されるように, スミスは, 労働を真の価値尺度とし, その労働タームで表示された価格を「真実価格」, 貨幣タームで表示された価格を「名目価格」としている。この点は, スミスの議論を通じてある程度一貫しており, 事実上, 労働のタームでの「真実価格」が, 真実価値, 真実交換価値にあたるものを意味し (「世間一般に流布している意味 (popular sense)」

での「真実価格」は別として: WN I.v.8-9. 大河内訳 I, 58頁を見よ。また, 本稿の, 注5を含め2の【問題2】も見よ), 貨幣のタームでの「名目価格」が, 名目価値, 名目交換価値にあたるものを意味している, とみることもできる (このことは事実上, スミスのいう「市場価格」, 「自然価格」にもあてはまると考えるのであって, 事実上, 真の価値尺度で表示された「市場価格」が「真実市場価格」, 貨幣のタームで表示された「市場価格」が「名目市場価格」で, 「自然価格」についても同様, ということになる)。また, スミスの場合, 貨幣タームで表示された「名目価格」・「名目交換価値」も, 生産された一商品としての貨幣 (金銀) のタームで表示されたものという意味で, 相対価値・相対価格であり, 真の価値尺度, 労働のタームで表示された「真実価格」・「真実交換価値」も, 一商品としての労働のタームで表示されたものという意味で, 相対価値・相対価格であるといえる。また, 事実上, 市場で取引される各商品は, 価格 (相対価格・相対価値) を持ち, そしてそれらの商品価格の逆比率が商品間の交換比率ということになっている, と考えることができる。中川 (2016), 581-83頁, 704-5頁注20を見よ。

- 4) 中川 (2020), 7-8, 16頁を見よ。
- 5) なお, スミスは, 第10段落中で, 「同一の真実価格は常に同一の価値を持つ, しかし金銀の価値の変動のゆえに, 同一の名目価格は時として, 非常に違った価値を持つ」と述べる。この文言については, 筆者は, スミスのいう意味での同一の真実価格を持つ事物は, 常に同一の支配労働量タームでの財貨の量に対する購買力を持ち, 世間一般に流布している意味での同一の真実価格を持つ事物は, 常に同一の財貨購買力を持つが, 同一の名目価格を持つ事物は, 貨幣価値の変動, 貨幣の側での変動のために, 時として, 非常に違った支配労働量タームでの財貨の量に対する購買力, あるいは単に, 非常に違った財貨購買力を持つことになる, といった事情を指すものとして理解しておくこととする。ただし, それに続くスミスの議論では, 例えば, 事実上, 名目所得 (名目賃金所得を含む) に対するものとしての実質所得 (実質賃金所得を含む) については, 支配労働タームで示されたものが考えられ, 名目賃金率に対するものとしての実質賃金率については, 支配しうる生活の必需品と便益品——支配しうる生活資料・支配しうる財貨——タームで示されるものが考えられる傾向がある。
- 6) O'Brien (1975), p. 82.
- 7) 例えば中川 (1995a) および中川 (1995b), 中川 (2010) および中川 (2016) を見よ。
- 8) Meek (1973; 1956), pp. 63-64, p. 64n. 1, pp. 66-68, 邦訳, 71頁, 71-72頁注1, 75-77頁, 中川 (2016), 190-91, 281-83, 546-48頁を見よ。なお, ミークは, 価値の尺度という言葉は例えばフィートざしが長さの尺度, ぜんまい秤が重さの尺度といったのと同じ意味での尺度, また, 価値



- の内容 (stuff), 実体 (substance) を測定するだけでなくその内容または実体を体现 (embody) する一種の内在的尺度 (inherent measure), という二つのことのいずれかを (あるいは多分その両方を) 意味しうる, とする。また, 価値の源泉 (source) または原因 (cause) の説明と, 価値の規制 (regulation) または決定 (determination) の説明とは, 厳密には同一のことではない, とする——なお, 例えばシュムペーター (1954) も, ある事物が交換価値を持つことを説明する要因を指示することと価値を規制または規定 (govern) する要因を指示することとは, 厳密には同一のことではない, とする。Schumpeter (1954), p. 590, 邦訳, 第4分冊, 1240-41頁を見よ。中川 (2016), 119頁注27も見よ——。そして, ミークは, 「内在的尺度」の可能性を認めるとともに, スミスのいう「真の尺度」としての支配しうる (現在の) 労働は「内在的尺度」として構想されてはいない, とみる。ミークは事実上, スミスの議論では, 価値の「源泉」(「原因」) については, 商品が価値を得るのはその商品が社会的労働の生産物であるからということよる (『国富論』第1篇第2章と第3章での社会的分業の分析から) のであるが, 支配しうる (現在の) 労働という「真の尺度」で, 他財貨に対する購買力としての商品価値の大きさを確定したうえで, その商品価値の大きさを規制, 決定しているものについての最終的な問題へと進むことになっており, 第1篇第5章はもっぱらそのようなものとしての「価値の尺度」を論じることにあてられている, とみるのである。詳しくは, Meek (1973; 1956), pp. 51, 60-63, p. 62n. 3, 邦訳, 53-54, 66-71頁, 70頁冒頭注1, 中川 (2016), 84-87, 110-11頁, 119-20頁注25-28を見よ。
- 9) オドーネルは, そのようなものとしてのミークの見解を批判しようとする。それについては, O'Donnell (1990), pp. 240-41n. 20を見よ。
- 10) O'Donnell (1990), pp. 63-67, 中川 (2016), 補論 I の I-III, および514頁を見よ。
- 11) またオドーネルは事実上, 「価値の説明 (価値の因果的説明) の問題・価値理論の問題」と「価値尺度の問題」とは論理的に別個の問題と捉え, そして, スミスは「価値の説明」の脈絡でも, 「価値尺度」の脈絡でも, 「体化労働」と「支配労働」とを混同してはいなかった, とする。本文中のことを含め以上の点については, O'Donnell (1990), pp. 65-67, 72-73, 中川 (2016), 補論 I の, III, VI の3, および515頁, 549-50頁注48-49を見よ。
- 12) 価値の因果的説明と価値の尺度といったことを中心に, 『国富論』第1篇第5章で取り扱われている問題ということ巡って提示されてきた諸見解については, 中川 (2016) の第II部第2章を見よ。なお, 価値の因果的説明の問題と価値の尺度の問題, また, 価値の原因の問題と価値の決定の問題および価値の尺度の問題, スミスの議論におけるそれらの問題, といったことそのものについては, 別の機会に考察したい。
- 13) 詳しくは, Davenport (1908), pp. 14-19, incl. n. 3, pp. 20ff, 25, 中川 (2016), 57-59頁注50, 143頁, 164-65頁注37を見よ。
- 14) 中川 (2020), 特に, 10-12, 18-19頁を見よ。中川 (2020) で示したスミスの「商業的社会」に関する筆者の理解との比較での, 第5章の分析の背景をなす社会に関連する小林 (1973, 1976), 小沼 (1983a, 1983b), 星野 (2018, 2019), カーリル (Khalil 1991) の各所説については, 中川 (2020), 5-6, 14-18頁を見よ。なお, 星野 (2021) はまた, 「商業社会」と「未開社会」間で分業の満開開花か萌芽形態かの段階的相違がある, とする。星野 (2021), 145頁注20。
- 15) 本稿注8, 11を見よ。
- 16) ただし, 筆者は, 資本蓄積と土地占有の行われる社会での価値決定についてのスミスの議論そのものは現実の価格 (市場価格) の決定についての議論, と把握する。その点については, Nakagawa (2021b), pp. 3-7, 12-13を見よ。Nakagawa (2021a), pp. 12-23も見よ。
- 17) なお, シュムペーターは, 当時すでに発明されていた指数方法を知らなかったスミスは貨幣に代わる「ニューメラル」として最終的には商品としての労働 (支配労働) を選び出した, とみる。詳しくは, Schumpeter (1954), p. 188, incl. n.19, 邦訳, 第1分冊, 391-92頁, 393頁注19, 中川 (1995a), 187, 191頁を見よ。また, 例えば, Schumpeter (1954), pp. 526, 701, incl. n. 7, p. 1089, 邦訳, 第3分冊, 1105頁, 第4分冊, 1469-70頁, 1470-71頁注7, 第6分冊, 2292頁も見よ。
- 18) 例えば, 中川 (2016), 581-84, 675-77頁を見よ。また, 例えば, Das Gupta (1960) および Das Gupta (1961), 中川 (1995a) の「37」, 中川 (2016), 53-54頁注38も見よ。
- 19) ペティは『租税貢納論』(1662) において, 例えば, 投下労働量比率の変化による銀と穀物との間の相当関係の変化といった考えを示す (Petty (1986; 1662), pp. 50-51. 邦訳, 89-90頁)。また, 十分の一税の大きさの経時的な比較を支配労働量で行うといった考えを示している (Petty (1986; 1662), p. 78. 邦訳, 136頁)。前者は, 投下労働量による相対価値の決定およびその経時的変化の説明 (投下労働価値説) を示唆し, 後者は, 収入額の測定およびその経時的比較を可能にする尺度, 価値の測定およびその経時的比較を可能にする尺度としての支配労働量, といったことを示唆するものと把握できるわけであるが, 一時点における価値の測定および異時点間の価値の比較を可能にする価値尺度という『国富論』に示されるスミスの考えは, 後代の経済学の展開にとって大きな意味を持つこととなった。例えばマルサス, リカードも, それぞれの意図から異時点間比較を可能にする「不変の尺度」またその代理物といったことに関わる問題に注意を払った。そして, 古典派経済学の時代においてペイリーは事実上, 価値とは相対的・相互的なもので, 他のすべての財貨の価値が変化するなかでいかなる財貨も価値が不変に留まりえず, そのような普遍の変動のなかにあっ



- て「不変の価値尺度」を語るのは矛盾したことであり、そのような物を持つことは経験的にも概念的にも不可能である、といった問題を提示した（この見方は、現代の経済学においても大きな影響力を持ち続けている）。そして、不変の価値尺度は不可能とみて次善の尺度として金を考えたリカードウ（1951; 1817）に対し、マルクスは、ベイリーの後にあって、同時に価値の実体を形成する価値尺度としての内在的尺度（das immanente Maß）と貨幣は価値の尺度だという意味における価値の尺度（スマスはそれらを混同、また、後者の尺度の場合には不変の価値尺度追求は不可能事）、といった見方を提示した。またそれとは別に、スラッファ（1960）は、例えば「その商品以外の生産物の価格運動を孤立させて、あたかも真空のなかにあるかのように観察することを可能ならしめる標準」としての「標準商品（標準合成商品 standard composite commodity）」といった考えを提示し、その意味での、不変の価値尺度に対応するものの可能性を肯定することとなったのである。中川（2016）、566–77、671–73頁、Sowell（1974）、p. 103、Ricardo（1951; 1817）、chap. 1, sec. 6、Baily（1967; 1825）、pp. 55–56、邦訳、49頁、Marx（1965–68）、Bd. 1, S. 121、大内・細川訳 I、158頁、Sraffa（1960）、pp. 18, 20、邦訳、29–30、32頁を見よ。
- 20) スマスの尺の用途ということについては、例えば、中川（2016）の補論Ⅱを見よ。

## 参 考 文 献

- 小沼宗一（1983a）：「アダム・スマスの同感と「社会の初期未開の状態」」『東北学院大学論集 経済学』92、47–77頁。
- （1983b）：「アダム・スマスの価値尺度論」『東北学院大学論集 経済学』93、23–51頁。
- 小林 昇（1973）：『国富論体系の成立』、未来社。
- （1976）：「小林昇経済学史著作集Ⅱ——国富論研究（2）——」、未来社。
- 中川栄治（1979）：「アダム・スマスの価値論における諸価値および真実価格：語法に関する諸見解——海外におけるアダム・スマスの価値論についての諸研究から——」『広島経済大学経済研究論集』1（4）、217–48頁。
- （1995a）：『「アダム・スマスの価値尺度論」に関する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——（上）』、広島経済大学研究双書第14冊、広島経済大学地域経済研究所。
- （1995b）：『「アダム・スマスの価値尺度論」に関する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——（下）』、広島経済大学研究双書第15冊、広島経済大学地域経済研究所。
- （2010）：『「アダム・スマス価値尺度論」欧米文献の分析——基本的諸問題を巡って——（上）』、晃洋書房。
- （2016）：『「アダム・スマス価値尺度論」欧米文献の分析——基本的諸問題を巡って——（下）』、晃洋書房。
- （2020）：「アダム・スマスの「商業的社会」」『広島経済大学経済研究論集』43（2）、5–21頁。
- 星野彰男（2018）：『アダム・スマスの動態理論』、関東学院大学出版会。
- （2019）：「スマス理論体系の完結性」『経済系』（関東学院大学経済経営学会研究論集）277、29–47頁。
- （2021）：「生産力論におけるスマスとマルクス」『経済系』（関東学院大学経済経営学会研究論集）283、134–48頁。
- Baily, S. (1967; 1825): *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value; Chiefly in Reference to Writings of Mr. Ricardo and His followers*, London: R. Hunter, 1825; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley. 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判——価値の性質、尺度、及び原因に関する論文——』、日本評論社、1941年。
- Blaug, M. (1959): 'Welfare Indices in *The Wealth of Nations*,' *Southern Economic Journal*, 26(2), pp. 150–53.
- （1978; 1962）: *Economic Theory in Retrospect*, 3rd ed. Cambridge: Cambridge University Press. 久保芳和その他訳『新版 経済理論の歴史』（全4巻）、東洋経済新報社、1982–86年。
- Bowley, M. (1973): *Studies in the History of Economic Theory before 1870*, London and Basingstoke: Macmillan.
- Das Gupta, A. K. (1960): 'Adam Smith on Value,' *Indian Economic Review*, 5(2), pp. 105–15.
- （1961）: 'Adam Smith on Value: A Postscript,' *Indian Economic Review*, 5(3), pp. 285–87.
- Davenport, H. J. (1964; 1908): *Value and Distribution: A Critical Constructive Study*, Chicago: University of Chicago Press, 1908; reprinted ed., New York: Augustus M. Kelley.
- Deane, P. (1978): *The Evolution of Economic Ideas*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kaushil, S. (1973): 'The Case of Adam Smith's Value Analysis,' *Oxford Economic Papers*, 25(1), pp. 60–71.
- Khalil, E. L. (1991): 'Adam Smith's Concept of Labor-Commanded: A Study in Misinterpretation,' *New York Economic Review*, 21(2), pp. 34–49.
- Marx, K. (1965–68): *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 26.1–26.3, (hrsg.) Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz Verlag [Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert (Vierter Band des „Kaptals“)*, 3 Teilen]. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第26巻（全3分冊）、大月書店、1969–70年『「剰余価値学説史（『資本論」第4巻）』（全3分冊）』。
- Meek, R. L. (1973; 1956): *Studies in the Labour Theory of Value*, 2nd ed. London: Lawrence & Wishart. 水田 洋・宮本義男訳『労働価値論史研究』、日本評論新社、1957年〔初版の邦訳〕。

- Nakagawa, E. (中川栄治) (2021a): 'Adam Smith's Causal Explanations of the Variations in the Value of Commodities in the Progress of Improvement: Rent Theory and Value Analysis (1),' *HUE Journal of Economics and Business* (『広島経済大学経済研究論集』), 43(3), pp. 5–24.
- (2021b): 'Some Implications of Adam Smith's Causal Explanations of the Variations in the Value of Commodities: Rent Theory and Value Analysis (2),' *HUE Journal of Economics and Business* (『広島経済大学経済研究論集』), 44(1), pp. 1–16.
- O'Brien, D. P. (1975): *The Classical Economists*, Oxford: Clarendon Press.
- O'Donnell, R. (1990): *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, Basingstoke and London: Macmillan.
- Petty, W. (1686; 1662): 'A Treatise of Taxes and Contributions,' in *The Economic Writings of Sir William Petty*, (ed.) C. H. Hull, 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1899; reprinted in one volume, Augustus M. Kelley. 大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』, 岩波書店, 1952年。
- Ricardo, D. (1817; 1951): *The Works and Correspondence of David Ricardo*, (ed.) P. Sraffa, vol. 1: *On the Principles of Political Economy and Taxation*, Cambridge: Cambridge University Press. P. スラフファ編『デイヴィッド・リカード全集 I』: 堀 経夫訳『経済学および課税の原理』, 雄松堂書店, 1972年。
- Schumpeter, J. A. (1954): *History of Economic Analysis*, New York: Oxford University Press. 東畑精一訳『経済分析の歴史』(全7冊), 岩波書店, 1955–62年。
- Smith, A. (1776; 1976): *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, (eds.) R. H. Campbell and A. S. Skinner, Oxford: Clarendon Press; Glasgow edition. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年。
- (1790; 1978): *Lectures on Jurisprudence*, (eds.) R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein, Oxford: Clarendon Press; Glasgow edition. (Report dated 1766部分——B ノート——の邦訳: 水田 洋訳『法学講義』, 岩波書店, 2005年。)
- Sowell, T. (1974): *Classical Economics Reconsidered*, Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Sraffa, P. (1960): *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge: Cambridge University Press. 菱山 泉・山下 博訳『商品による商品の生産』, 有斐閣, 1962年。